モノグラフの転位

崎　山　政　毅

I 「モノグラフ」と「ヘゲモニーなき支配」

「サバルタン」を歴史における鍵概念として浮かび上がらせる転回点となったのは，南アジアにおける植民地期および脱植民地過程をめぐるさまざまな領域を連関させたプロジェクトとして，サバルタン研究グループが組織されたことに求められよう。このグループに加わった研究者たちによって集団的な作業が開始されたのは，八〇年代はじめのことである。そのときこの研究者たちが依拠したのは，アントニオ・グラムシの『獄中ノート』から英語へと翻訳された断章であった。グラムシ研究所（ヴァレンティーノ・ジェルラターナ）による一九七五年校訂版では，その断章に対応するイタリア語テクストは，以下のようになっている。

> §5　方法的基準。支配階級の歴史的統一は国家において起こるものだが，その歴史は本質的に国家および国家集団の歴史である。だが，その統一の形態形式的ばかりとはいえない固有の重要性をもっているからといって，その統一が単に法的・政治的なものにすぎないと考えるべきではない。歴史的統一は，本質的に，具体的事実を媒介とする国家もしくは政治社会と《市民社会》との有機的関係の結果である。サバルタン諸階級は，いわば，みずからが《国家》になれないかぎり，統合されるものでも，統合可能なものでもない。その歴史は，したがって，市民社会の歴史にむすびついている。いわば市民社会の歴史の，そしてそれを媒介とする国家もしくは国家集団の歴史の，《解体した》不連続な機能なのだ。したがって以下の点を研究する必要がある。1）サバルタン社会諸集団の客観的形成。経済生産世界において実証される発展と展開をたどることで，その出自である既存の社会集団の心性・イデオロギー・目的を一定期間保持しつつ，いかにして量的拡大をとげたか。2）能動的―受動的を問わず，政治的支配集団への［サバルタン社会諸集団の］順応。固有の要求実現にむけて，その集団へ影響力を行使するための試み。その試みが解体，刷新，新生のプロセスを決定づけるなかで引き起こす結果。3）サバルタン社会諸集団の同意および管理を維持するための，支配集団による新たな諸政党の誕生。4）限定的部分的性格をもった要求を目的とする，サバルタン社会諸集団自体の形成。5）サバルタン社会諸集団の自律性を容認する新たな更生，ただし旧来の枠組みにおける。6）統合的自律性を容認する更生。（強調はグラムシ）

ファシストの獄で重篤な段階へとおしすすめられた宿痾のために，グラムシはこの六点にわたる探究を実行にうつす時間はすでに残されてなかった。サバルタン研究グループがこの六つの論点を出発点のひとつにおいたということは，グラムシが遺した「未完の探究計画」が思いもよらぬ「相続人」によって引き継がれたことでもあるだろう。

そして，この「相続人」たちの試みは，インドを中心とした南アジアの歴史・社会研究がそれまで対象から排除してきた人びとを主軸においた歴史記述を多産するにいたった。それらの歴史記述が「モノグラフ」のかたちをとったのは，意識的な取り組みの結果であったというよりはむしろそれまでの「正統」な歴史記述をふまえたことに多くを因っているのではないかと思われる。しかし，ひとつのテーマあるいは対象に焦点を絞り込みながら追究をする「モノグラフ」という記述の形式は，グラムシのアイディアと一致していた。

六点にわたる上記の研究計画が定式化されておさめられた一九三四年の「ノート二五」（タティアーナ・シュフトがつけた整理番号ではXXIII）の基調をなす，一九三〇年に書かれた「ノート三」（XX）の断章には次のようにある。

> §14　支配階級の歴史とサバルタン（従属）諸階級の歴史。サバルタン諸階級の歴史は，必然的に断片化されており，エピソード的である。これらの階級の諸活動においては，地域的な（発展）状況［のちがい］にもかかわらず，統一へむかう傾向が存在する。しかしこれはもっとも顕著にはあらわれない側

面であり，統一へと向かう傾向は，勝利が保証されたときにはじめてそれ自身の姿を現す。サバルタン諸階級は，彼らが反乱しているときでさえ，支配階級のイニシアティヴに従っている。サバルタン諸階級は不安に起因する［自己］防衛の状況にいるのである。自律的なイニシアティヴのあらゆる痕跡は，それゆえ，この上なく貴重な価値をもつ。いずれにせよ，モノグラフはこの歴史的探究にとって適切な形式であり，それには断片的な諸資料を広範に収集することが求められる。（強調はグラムシ）

このテクストでは，これまで歴史における主体から排除され「歴史の周辺」におかれてきた人びと（「ノート三」の時点では「サバルタン諸階級」とカテゴリー化されている）の歴史を探究する「適切な形式」として，「モノグラフ」が強調されている。だが，グラムシにおける「モノグラフ」の設定には，断片化されたエピソード的なサバルタン諸階級の歴史を集成する前衛的知識人という設定があらかじめ組み込まれていることを踏まえておかねばならない。同じノートの後段にあるように，サバルタン諸階級の運動の「自然発生性」を尊重しつつも，目的意識性という介入の政治を彼が手放してはいない点からも，そのことは明らかであろう。

グラムシは上記引用のちの断章で，次のように述べている（『ノート３』）。

いわゆる「自然発生的」な運動を無視したり，さらに悪いことに軽蔑したりすることは ― つまり，それらの運動を政治に組み入れ，それらに意識的な指導を与え，より高いレヴェルへと向かわせることを拒否するということだが ― ，しばしば非常に悪く深刻な結果を招き寄せるだろう。そのような場合，ほとんどつねに，サバルタン諸階級の「自然発生的」運動は，下記のような同時に生じる諸事由のために，支配階級の右翼の反動的な運動に付随させられる。たとえば，経済危機は，一方でサバルタン諸階級・自然発生的大衆の運動のあいだで不満をひきおこすが，他方で反動派による，政府の客観的弱体性に乗じてクーデターを企むような陰謀をうみだしもする，といったような。

「意識的な指導を与え，より高いレヴェルへと向かわせる」という言に見られる「目的意識性」は，「ノート二五」の六つの計画の最後の項へとたどりつくものといえる。その思考の経路は，グラムシの時代にあっては必然であった。「統合的な自律性」とは，支配のなかで従属的な位置をしめ，それゆえに周辺化・断片化されてきた諸集団が，（党の指導の下で）統一をなしとげて国民的な革命の主体へと自己を形成していくことにほかならない。グラムシは，「正統」な歴史記述の一ジャンルとしての「モノグラフ」を彼らの政治に活用する途を模索していた，といってもよい。「モノグラフ」は道具にすぎず，グラムシはその記述の形式自体を問題として考察の対象にはしないままに逝ったのである。

「モノグラフ」としてあらわれる歴史記述の生産機制に対する根底的な問いかけは，初期サバルタン研究の成果への反省のなかではじめて形をとる。歴史家ラナジット・グーハは，一九八九年に著した論文の最終章，「自己批判への序文」と題された部分で，以下のように述べている。

自律的な歴史記述の先触れであるような，未来のなにがしかの希望にしたがって実践されるラディカルな［歴史記述における］ナショナリズムが無力でありつづけてきたことには，次のような，信ずるに足る十分な理由がある。すなわち，資本の普遍主義的な推進力が容赦なくおしとどめる障壁として，植民地主義と植民地状況とを理解可能なものとする理論による，インドの地域統治の批判に逆行することが破産したせいである，と。その結果，われわれ自身の知的実践内部にあるどのような学問潮流も，国民を代弁するという土着ブルジョアジーの普遍主義的要求に対する原則的かつ包括的な（折衷主義的で断片的であることに抗する）批判を案出しえずにいる。国民を代弁するという要求は，ヘゲモニー的ではあるが粉い物でしかない。そうした要求の支えとなる歴史記述と同じぐらいの鮮明さと重要度をもった分節化の場を有する原則的かつ包括的な批判が提起されてはこなかったのだ。要するに，ヘゲモニーなき支配としての植民地体制の構造が見えてなかったことの対価は，われわれにとっては，［ポスト植民地状況のなかで－崎山］支配を引き継いだ体制の特質もまたヘゲモニーなき支配なのだという洞察を全面的に要請するものでありつづけているのである。（強調および［　］内は崎山）

この「自己批判」が意味するところは，次のようにまとめられるだろう。

すなわち，存在の様態として断片的でエピソード的なサバルタンの歴史を，統合的な自律性のもとに描き出そうとする「モノグラフ」は，グラムシの設定を可能にした「国民」あるいは「国家になる」よ

うなヘゲモニーの存在を不可避に前提とする。このことは，社会的諸関係の効果としてヘゲモニーを考えるならば，社会の統合的構成が前提されていることに等しい。

リソルジメントを経て，ヨーロッパの周辺ではあっても「近代国民国家」の在り方をまとったイタリアにおいて，サバルタンの歴史に適用される「モノグラフ」は，こうした前提をさしあたり措くことが可能だろう。だが，そのときの「モノグラフ」は，（たとえばインドのように）植民地の歴史を経験せざるを得なかった「きれぎれの諸社会の混成体」の地におけるモノグラフと同じ前提を共有しているわけではないのである。

「ヘゲモニーなき支配」という挑戦的な提起をともなったグーハの「自己批判」は，核心をついていると私は考える。それは，「きれぎれの諸社会の混成体」とわたしが呼んだ植民地的「社会構成」において，問われることなく見過ごされてきた核心でもあるだろう。冷戦構造の崩壊とポスト「共産主義」という時期区分が，同時に，第三世界のさまざまな地域における「民族解放・社会主義」という，一国主義的な国民創出の基軸がきたした破綻を意味しているとすれば，グーハの提起は，脱植民地化の輻輳する歴史過程における歴史記述の再考をするどく迫るものにほかならない。（付け加えれば，グーハの提起は，かつて「諸生産様式の接合」をめぐる論争として展開された領域において，まったく新たに問題を構成し直す作業をも要請している。）

先に述べたグラムシ的「モノグラフ」の設定は，ひとかたまりの「国民」を必要とする設定から導き出されるにちがいない。しかし，現に生きたサバルタンの男や女，人びとは，まずもって存在するヘゲモニーの統合的支配のなかを生きたのだろうか？彼女／彼（ら）からはじまる歴史の記述がヘゲモニーの問題にかりに突き当たるとしても，それはア・プリオリに設定されるものではないのではないか？

この問いは，グラムシには（あるいはサバルタン研究グループにとっても）思いもよらなかっただろう事態，すなわち，サバルタンの位置にある人びと自らが「声を発し」歴史の作業を開始した状況によって，さらに深く考えられなければならないものとなっている。とはいえ，そうした事態は「モノグラフ」という提起を放り捨てることを意味してはいない。

Ⅱ　遂行的な歴史介入としてのモノグラフ

サバルタン研究が植民地主義的歴史記述への批判をその基調においていることからは，その作業のなかに歴史記述の政治性がつねに問い返されなければならない課題として存在しているといってもよいだろう。その意味で，サバルタン研究における歴史記述の先駆的かつ好個の「古典」のひとつとして，カール・マルクスの『ルイ・ボナパルトのブリュメール一八日』をとりあげることは，さほど突飛なことではない。じじつ，グーハだけでなく，フェミニストの立場からサバルタン研究に脱構築的な介入をおこなったガヤトリ・スピヴァクも，ときにマルクスのこの作品に言及している。

ここで注目しておきたいのは，『ルイ・ボナパルトのブリュメール一八日』の初版（一八五二年）の可能性である。

一七年後に出版された第二版の序文で，マルクスはつぎのように書いている。

> このように言えばわかるように，本書は事件が直接に切迫する中で書かれ，その歴史的素材は［一八五二年］二月以後には及んでいない。……／私のとほぼ同時に同じ対象を論じた著作のうちでは，二つだけが注目に値する。ヴィクトル・ユゴーの『小ナポレオン』とプルードンの『クーデタ』である。　ヴィクトル・ユゴーは，クーデタの発行責任者に対する辛辣で才気に満ちた悪口だけで我慢している。事件そのものは，彼の場合には青天の霹靂のように現れる。彼はそこに一個人の暴力行為しか見ていない。彼は，この事件の主導権を，世界史上に例のないような一個人の暴力に帰することによって，この個人を小さくするかわりに大きくしていることに，気づいていない。プルードンのほうは，クーデタを先行する歴史的発展の結果として描こうとしている。だが，クーデタの歴史的構築が，こっそりとクーデタの主人公の歴史的弁護に変わっている。彼はこうして，我々のいわゆる客観的歴史記述者の誤りに陥っている。それに対して私は，中庸でグロテスクな一人物が主人公の役を演じることを可能にする事情と境遇を，フランスの階級闘争がいかにして創出したか，ということを証明する。（強調はマルクス，｜は原文改行箇所）

マルクスのこの作品をとりあげてきた論攷は，基本的に『資本論』第一巻出版後に上梓された第二版テクストを対象としてきた。むろん，『資本論』を参照項におく読みが意味をなさないわけではない。しかし，「事件が直接に切迫する中で書かれ」た『ブリュメール一八日』初版における言葉の力は，『資本論』へと還元されてしまってはならないものである。

それはなぜか。マルクスの『ブリュメール一八日』における修辞をきわめて精確に読み込んだドミニク・ラカプラの言葉をひけば，「彼［マルクス］のレトリックが，事態の成り行きに影響を与えようとする活発な言語の遂行的使用を志向している」（『思想史再考』）からにほかならない。それも，パロディというかたちによる遂行的な介入である。

この論点を梃子にして，「ルンペンプロレタリアート」に対するマルクスの罵倒を思い起こしてみよう。都市部で展開する「政治」において「反革命」の尖兵というエージェンシーをはたした，グラムシの観点からはまさしく「サバルタン社会集団」であろう人びとに対して，マルクスは数行におよぶ（かの有名な）悪罵の羅列を投げかけている。この部分について，ラカプラは次のように指摘する。

> ルンペン・プロレタリアートを「ブルジョア社会のくずども」とか「あらゆる階級のくず，ごみ，かす」だとする手きびしい叱責は，マルクスがプロレタリアートにいかにコミットしているかを証明するとともに，逆説的に，ラ・ボエムに不快感を覚える，彼のブルジョア的，ヴィクトリア朝的ともいえる品位の感覚を証明するように見えるだろう。いずれにせよ，その非難は，近代社会におけるこのグループないしカテゴリーの抑圧という問題と，ラディカルな政治が抑圧とその意味を問題化する必要とを閉ざしてしまう。マルクスの有名なルンペン・プロレタリアート描写は，一般に根本的「他者」の認識を特徴づける，誇張された異質性とどっしりした同質性とを結合している。……／革命を妨げるルンペン・プロレタリアートやその他の諸グループにたいするマルクスの敵意の強烈さは，プロレタリアート自体がマルクスの願っているような革命の遂行者ではなく，他のグループも彼が求めている社会変革の見込みを提出するものでないかもしれないという，隠され，抑圧さえされた恐れのひとつの関数としてみられよう。（／は原文改行箇所）

「他者」をきめつけ，非難することを占有するマルクスの「特権」は，きわめて差別的なものであることは明らかだ。そこには歴史記述者が「歴史」を完全に説明可能で制御可能なものとしたいという超越的な位置への欲望が貼り付いてもいよう。先に引用したグラムシのサバルタンの自然発生性に対する態度も，悪罵の落とし穴を免れてはいるものの，そうした欲望とはけっして無縁ではない。

この欲望に貫かれた「特権」を批判的におさえながらも，ラカプラは，語り手（マルクス）が歴史の出来事を完全に支配したいという欲望のなかでユートピア的なイデオロギーが反復されてはいても，マルクスの口汚いののしりがもつ遂行的・介入的な質がその理想の専制を覆している，と述べる。

『ブリュメール一八日』が歴史の「普遍的な法則」をとりあつかったものなどではなく，まさしく出来事を「客観的歴史記述」に対峙させる「モノグラフ」となっていることを，さらに考慮に加えてみよう。「客観的歴史記述」とは，この場合，生起したことを「時間の直行性」にしたがって「起こったとおり」に，経験による変容も偶然の邂逅による分岐の生成も欠いた，無時間性につらぬかれた遥かな高みから時系列化する記述をさす。それに対峙するモノグラフとは，自らもまた結合や反発する諸関係，交錯あるいは対立する諸力の渦中におかれながら，綴られていくものにほかならない。

そのとき，歴史を記述しようとする遂行的・介入的な言葉を介して，すべて見遥かす位置に安住しえない，その出来事のただなかで異なる可能性を折り展げようとするような，たえず自らの変化していく位置を確認しながらの作業が生まれている，といえないだろうか。

それは，可能的なものの持続的系列に塗り込められてしまった支配の歴史を転倒させる試みと言い換えてもよい。ジャック・ランシエールが言う「単独性の不－可能な行為としての出来事に支えを求めることによって，可能的なもののカテゴリーを経由せずに真理を時間へと結びつける思考」を現実のものとする作業である。

このときの「真理」とは，他者を決めつける支配と密接に連関する「客観的」な権力を指してはいない。それは，人びとの生きる関係に挿し挟まれ，行

為を生起させる凝集や非－行為へとつらなる散逸を呼び覚ます力の別名である。そして，出来事に支えられた「真理を時間へと結びつける思考」とは，さまざまに分岐しうる出来事が不在化されることによって平坦に縫い合わされた，出来事の「前史」と「後史」とを位置づけ直す作業であるだろう。

Ⅲ　エピソードの力能

しかし，この作業は容易にはなしえない。なによりもそれは，サバルタンの（複数形の）歴史が，グラムシのいうように「サバルタン社会諸階級の歴史は不可避的なエピソードであり断片化されている」（『獄中ノート３』）からである。この指摘は，サバルタンの歴史を周辺化する力においては，みごとに正鵠を射ている。

時間の因果論的な直行性を前提に置いた歴史記述であれば，記述の形式が，現在と切断された登録済みの「過去」にかんする「物語」となることは，ほとんど必然といえる。そのとき，「物語」の記述において，主なる筋から自ずとこぼれおちる「出来事」あるいは分岐がエピソードとなるだろう。

エピソードをエピソードたらしめるためには，なんらかのかたちで，「はじめ」と「おわり」が設定されざるを得ない。基本的にエピソードは過去形において，相互の論理的連関ではなく，種々の位相における，多型的でときに同時に生起する諸関係の力が互いに絡み合う状況結合，いわば「出来事の凝集」に支えられた，紆余曲折する語りとして描かれる（日本の異例の民俗学者，南方熊楠の言い方をかりるならば「蓄積型のはなし」，たとえば「わらしべ長者」のごとく，偶然が分岐を生み，その分岐がさらに偶然を呼び込みつつ，はなしが展開するようなかたちのように）。エピソードが，通俗的な定義がさす「結びつきの強くない一連の物語，場面」であるならば，この表現型は，統合的な歴史記述が支配するさなかでは強力に保持され得る。

しかし，昔話の場合とは異なって，歴史におけるエピソードはしばしば「はじめ」「おわり」の境界が明示的に設定されうるようなものではない。かりに「はじめ」「おわり」があろうとも，それは「物語」の形式が要請するものにすぎない。エピソード「それ自体」の自由度がかりに保証されるならば，「創発性」にひとしい分岐の生成によって，エピソードは断続移層の表現（時制が混乱しながらも現在に絡みこんだ言表）における「交錯する現在形の群」となるだろう。

そのとき，エピソードを「主筋」から切断された「エピソード」となさしめる（あるいは「エピソード」からも弾き出す），周辺化または不在化する排除の権力に対する批判が，サバルタンの歴史に接近しようとする試み（のひとつ）となるはずである。

この接近の試みは同時に，自己－他者あるいは主－客として両極化された「近代」の桎梏のなかに措かれているわたし（たち）の位置性を固定的すなわち非歴史的にとらえることへの実践的批判といえる。それは，抽象化されることによってじっさいには問いを回避するような姿勢への根底的な批判でもあるだろう。より詳しく言えば，「国民国家の批判」や「脱構築」を（一般的に）語ることが，国民国家の批判や脱構築の実践とはまったく異なるにも関わらず，そうした「大事業」をなしとげたかのごとく思い込むことを可能にするメカニズム（フランツ・ファノンであれば，学にまつわる「全体的雰囲気」とでも呼んだかもしれない）を，内破せしめる強度をもった実践＝批判である。

たとえば，現在，南アジアのサバルタン研究グループの中心的メンバーのひとりとなっている歴史家，ディペシュ・チャクラバルティは，「物語は語られうるのか，それは公共生活において，理性に照らして擁護可能な語り出しの立場を可能とするのか」というふたつの重要な問いをたてつつ，「マイノリティの歴史」に対する次のような批判をおこなっている（"Minority Histories, Subaltern Pasts"，「マイノリティの歴史，サバルタンの過去」，臼田雅之訳（『思想』第891号所収）を部分的に改訳した）。

> こうして［「マイノリティ」のリストがとりわけ60年代以降拡大してきたために－崎山］いまや「マイノリティの歴史」という表現は，国民の語りの本流から除外され排除されたことに抗議して，民主的な精神をもつ歴史家たちがそのために闘っている過去

を指し示すものになったといえよう。その結果，過去十年間は，歴史あるいは記憶にかかわる事柄において，ほとんどカルトめいた多元主義が流行している。国民の過去に関する，公的あるいは公的に祭り上げられた記述は，多くの国でマイノリティの歴史の旗手たちによって，挑戦を受けている。〈大きな物語〉を槍玉にあげるポスト・モダンの批評の数々は，国民がたった一つの標準化された語りしかもちえないことなどありえないし，国民はいつだって多くの競合する語りの偶然の結果だという議論の中で，有効な弾薬として用いられてきたのである。マイノリティの歴史は，取り込みと表象／代理を求める闘いを表現し，それはリベラリズムと代表制に基づく民主主義社会に特徴的なことである。
このように受けとれば，「マイノリティの歴史」が反体制的であるのは，その試みの主として前半部分であるということになる。そうした様々の「マイノリティの歴史」は，歴史記述の本流から排除されているかぎりで反体制的なのである。体制のうちに〈回収〉されたとたんに，反体制的な姿勢は余計なものとなる（あるいは，その立場を続けることは，下品なものとは言わないまでも，恩知らずを表すものと見られるだろう）。反体制的な方法に端を発しながら，「マイノリティの歴史」は「よい歴史」の一端に列なるおまけと成り果てるのである。それは私たちの視野を拡げ，歴史の主題／主体が全体としての社会をよりよく表象／代理するようにはする。

チャクラバルティの批判の核心部が，グーハの「自己批判」と重なっている点に，まずは注目をしておこう。そのうえで，彼が〈回収〉として規定したメカニズムが，一方で，「マイノリティの歴史」の政治的位相の限界を，他方で「普遍的時間」としての「他者の歴史」にマイノリティあるいはサバルタンの人びとを押し込め多様に意味付与する歴史記述の問題をめぐるものであることに，わたし（たち）は執拗にこだわるべきではないか。

「マイノリティの歴史」の政治性とは，たとえて言えば，このようになる。賃労働者たちの闘争が，剰余価値労働の搾取の軽減あるいは資本制的外被の拡充をもとめる要求であるとき，日本の経験がみごとに示すように，それは資本制のダイナミズムに〈回収〉され，資本制社会の洗練と緻密さをおしすすめる契機になってきた。このような，資本との「共犯関係」においてはじめて成立する政治性が，ここでは問題とされている。そして，かかる〈回収〉を可能にした歴史記述は，疑いようもなく，マイノリティあるいはサバルタンの人びとを「主体」として物語化された形式をふまえているのである。

この歴史記述は，言うまでもなく，「普遍的時間」の多様な下位リストのどこかしらへとそうした「他者」たちを位置づけるものである。エマニュエル・レヴィナスの言を借りれば，「叫びや抗議」さえも無化され，「見えない侮辱」に充溢した，多様で多元的な意味の織物がそこに生み出されている。

わたしは，たとえば，先住民族であるアイヌの存在を欠け落としてきた「日本（国民）史」に対する異議申し立てとしての「アイヌの歴史」の提起がもつ意義を，〈回収〉という一点において裁こうと言いたいのではない。「アイヌの歴史」から「日本」を揺るがせる力を殺ぎ落とし，その圧力と交換に，現在に嵌まり込んで生きる，エスノサイドの過去を勝手に精算した「時点」ではじめて成り立つ「多元的・多文化・多民族の日本」が登場する在り方に，いかに抵抗が可能であるのか，という問いをたててみたいのである。

この抵抗の領域を生成していく力能のひとつを，歴史のエピソードへとわが身を投擲する「モノグラフ」に求められないだろうか。この「モノグラフ」については，今のところ，断片に対しては断片として，エピソードには持続でも切断でもなく「つらなる」動きにおいて相応する，記述者の制御下にとどまりきらない記述のかたちとしか言えない。だがそれは，歴史の断片あるいはエピソードを生きる「モノグラフ」を歴史記述の特殊な範疇から，単独な「それぞれの存在が，各々自らの時間を生きる」変転に応じようとする表現へと転位を迫る力能となるのではないだろうか。

Ⅳ 《声》へ

そして，最後に ― これはほとんど見果てぬ夢どころか妄想と思われるかもしれないが ― ，サバルタンの歴史をめぐる「モノグラフ」の困難きわまる作業として，《声》への応答を考えてみたい。

ラテンアメリカのサバルタン研究においては，「他者の声」という問題を，とりわけ先住民族の証言との関連で取り扱った仕事がこの間取り組まれてきたが，基本的にそれは文字（書記）を介したもの

であった。「他者の声」という魅力的な設定も，メタフォリカルなレヴェルをなかなかに超え出るものにはなっていない。そのような事態は，「ポスト植民地社会構成」（この用語にはいくつもの留保をつけておかなければならないが）において，「混血化」を不可避に伴う各々の国家の（従属）資本主義化過程に深く組み込まれた人種差別主義に因っている。すなわち，先住諸民族は社会統合の対象とされるさいに，アルファベット化（識字を必ず要請する）の運動に巻き込まれながら，同時に旧宗主国の言語の「不十分な（バイリンガルあるいはマルティリンガルな）使い手」として，あるいは旧宗主国言語をつかえない「モノリンガルな非識字者」として構造的に周辺化されてきたのだった（この一般化があてはまらない諸地域がむろんのこと存在している。また，便宜的に「ラテンアメリカ」という名称をここでは用いているが，わたし自身の考えでは，一国家の内部に閉じこめられた「地方」の別称ではない，国境線による分断とは異なる歴史的文脈において，「地域」をその都度設定しなおすべきであろうと考えている）。

もちろん，このような歴史的説明以上に，歴史研究において《声》がどこまで資料足りうるのか，という問題がたちはだかっている。この点については，後に触れることとして，まずは声の政治性という点から，はじめよう。

ルソーは『言語の起源についての試論』において，声の政治性をこう述べた。「ある場の会衆に聞こえないような言葉は，奴隷の言葉である」。そう，たしかに，ルソーの指摘は，近代の政治，とりわけ組織された諸運動においては，正しい。

たとえば，ファノンが「こちらアルジェリアの声」で描き出した，アルジェリア解放戦線のラジオ放送の力を思い起こしてみればよい。だが，聞こえ，届く声が，「奴隷」からの離脱を保証するにとどまらない，暴力に彩られたヒエラルヒーの（再）生産を可能とする「国家のイデオロギー装置」であったこともまた事実である。ナチス・ドイツ，あるいは帝国日本での声（のテクノロジー）がもたらした政治を想起してみれば，「遠くまで」聞こえ・届く声がいかに従属を「臣民化」を推し進めたのかは歴然としている。

ここで声の場がどのように形成されていたのかを問うてみよう。ファノンにあっては民族解放の独立戦争が，ナチス・ドイツあるいは帝国日本の場合では総力戦体制がというように，「国民＝民族」の（ときに外延化された）場が，そのままにして声の場であった。

植民地主義が文化的のみならず物理的暴力としてはたらいてきた地政学的な領域において，声の政治性は，たしかな傾向として，「国民」と分離不可能なほどに癒着した場を繰り返しつくりあげてきた。とはいえ，そうした場にのみ，つまり，なにがしかの目的から逆算された計算可能・統御可能な場にのみ，声が閉じこめられるわけではない。

ここで個人的な体験に触れさせていただきたい。

内戦終結からそれほど時を経ないグァテマラで，アティトラン湖という風光明媚な観光地に程近い，先住民が人口のほとんどをしめる村に出かけたことがあった。村長はラディーノ（白人のような外見をもった「混血」）で，中央政府につてをもっていたらしく，政府からの援助金を手に入れることができたということだった。ところが，この村長は，援助金のほとんどを着服して自分の経営する薬局の改装にまわしてしまったのである。飲料水ひとつをとっても容易には手に入らない村のこと，簡易濾過装置をつけた井戸の設置にでも使えば，使い込みが露顕しても大事には成らなかったかもしれない。だが，アリバイづくりとして村長は，残りの金で，村の中央広場にレンガのブロックを敷き詰めた（それは，中央広場に面してたっている彼の薬局を引き立てる光景のように，わたしには思われた）。

彼の薬局が生まれ変わったような姿に改装されたことばかりか，レンガのブロックなどという，村長が見栄をはるときにしか役立たない金の使い途に，村人たちがついに怒りを爆発させた。わたしが泊めてもらっていた（「バイリンガルな」先住民の家だったが）家族も，他の村人たちとともに，村役場の真前にあるブロックが敷かれた中央広場に抗議のために出かけていった。

そこには危険を察した村長が自分の保護のために要請した警官がすでに出動しており，村長の声が，

拡声器をつうじて，不穏な集会を解散して家へ帰れ，と語りかけてくる。

何がきっかけになったのかはよくわからないが，集まっていた村人のなかから女たちが叫び，それがあっという間にそこにいた人びとのほとんどに広がっていった。口々に叫びながら，村人たちは（そしてわたしも）石を，警察に，役場に，そして改装されたばかりの村長の薬局に投げつけた。

結局，警察が暴徒鎮圧用ゴム弾を乱射しはじめたため，村人たち（もちろんわたしも）逃げ出して，その日の「暴動」は終わり，わたしはホスト・ファミリーから「早く離れた方がいいよ」と言われて逃げ出したため，その後何日も同様の事態がつづいたことを新聞の片隅をつうじて知るにとどまったのだが，そのときの叫びや声（拡声器を通じた村長のものも含めて）を何度となく思い出す。それは，否応なく《いま・ここ》に関わっている。

たとえ，テープレコーダーやヴィデオカメラがあって記録していたとしても，そこに内記されたであろう音は，わたしの体の震えとともにあった，（交換不可能な《いま・ここ》にほかならぬ）「その時，その場」の声ではありえないだろう。それは，瞬時に過ぎ去ったにもかかわらず強烈な，強弱，高低，韻律，肉体と息とを伴う「出来事」にほかならなかった，といってもよい。そのとき，それまでにない（とはいえ何度となく失われた反復があったかもしれず，今も，これからもいつ何時異なるかたちで反復がされる）何者かにわたしたちがなったとは言えないだろうか。

誰もがそうなる瞬間を予測してはいなかったが，そこで生起した，力の偶然の結ぼれたる「出来事」によって「前史」と「後史」に鋭く切り分けられた《いま》のただなかに，わたしたちはわたしたちというかたちでしか在りようもないまま，いたのである。エルンスト・ブロッホが『異化』でいみじくも述べたように，「時の流れに乗せられて，盲目であり，次の瞬間の成行きについてはなにも知らない」。そうであるがゆえに，わたしたちは変化に身を任せざるを得ないまま，「なった」のである。

ここで連想するのは，カルロ・ギンズブルグが『裁判官と歴史家』中で述べている，声が文字のなかに失われる問題である。ギンズブルグは，彼の旧友が関わったとして「容疑者」にでっち上げられた，政治的暗殺をめぐる冤罪事件の供述調書がもつ水をももらさぬ物語をそこで取り上げている。『チーズとうじ虫』のときと同様に，歴史家として彼はその場にいたりいなかったりしながら立ち会う。そして，取り調べ室での取り調べ官と被疑者，あるいは公判廷での裁判官・検事・弁護士と証人たちという，「閉鎖空間」における声のやりとりが，調書にまとめあげられていくなかで，そこにあった息づかいや口ごもり，混乱，矛盾をきたした発言が，ある因果の流れに抑え込まれ閉ざされていく有り様をえぐり出すのである。

ギンズブルグは，「立ち会う」ことにおいて，声に応えようとする。その声は彼《の》声ではないが，彼の耳が応じた，応じてしまった声だ。その声は，書かれた「史料」の構成を弱める読みにはじまり，その構成の関節において不在化されてしまった亀裂を自ら提示するに至る「過程」に顕われる。この「過程」は，平坦な時間の縫合ではなく，提示される亀裂を亀裂としてとどめる「なる」ことの，あるいは《いま》の，不連続を抱え込むものである。声はもはや制御の暴力がおさえこめる「史料」ではない。「他者」として「史料」を扱うといった，好き勝手に蹂躙できる従順な「死者」として「他者」を見出すブルジョア・イデオロギーを打ち砕くものとして，声は立ち現れる。

このとき，「立ち会う」ことは，調書編纂者がおこなう超越的な無時間性からの直行する「物語」に決定的に対峙し抵抗する作業である。ギンズブルグは，歴史における局所者（彼の旧友）とともにあろうとする。彼の単独な経験の時間もそこに組み入れられた異なる時間のリズムの間を行きつ戻りつしながら（位置をさまざまに移動しながら），平滑な理解への反撃をもたらすかもしれない，さまざまなコンフリクトに盈ちた応答の領域を生み出す作業において，声へと接近しようとしているのである。

それはまさしく「モノグラフ」として書かれねばならなかったものである。この歴史を記述することのエピソードにおいてわたしたちが出逢っているのは，おそらくは，わたしたちがサバルタンの歴史に，

排除の系譜学への抵抗において応答しようとするさい，避けては通れない課題のひとつではないだろうか。

1998年11月4日